笛の旅　第二集　石川県津幡町から福井県和泉村へ

――――横笛の製作と地場産業の育成と――――

農業科　松　田　史　大

はじめに

先日、石川県石川郡野々市町から一通の手紙が届く。

指し出し人は山田治さんという方で、文面は次のようなものである。

「私は、現在、同封の写真のような子供向けの太鼓を作っています。和太鼓は大変価格が高く、又町の環境が昔と違って激変してしまい、何処ででも気軽に太鼓を打つことは難しくなってしまいました。なんとかして、住宅街にある保育園・幼稚園でも太鼓打ち遊びをさせたいと思いまして、安くてあまり喧しくない太鼓を作りました。幼児は太鼓で遊ぶのが大好きなようで、伸び伸びと明るい笑顔を見せてくれます。最近、小学生向けの太鼓を作りテスト使用中です。連休明けには、近隣の小・中学校の音楽の先生の集会で、この太鼓の説明会をします。私としては、子供のストレスの解消をねらい、音楽授業開始の前に、10分間程度、子供達に自由に太鼓を打たせるようにしてもらっています。クラスの中に必ず一人か二人むちゃくちゃに太鼓を叩く子がおりますが、その日の子供の心のありようが、わかるような気がします。イジメ解消に少しは役に立っているように感じています。後は音楽の授業に使ってもらっています。この小学校では、和太鼓を授業に使った所、即近所から音が喧しいと苦情があり、小生の作った太鼓が役に立ったと云う訳です。笛の件ですが、3月末にNHKTV に私の太鼓のことが放映され、それをみた方が遠赤外線で焼いた竹を持って来られました。写真は、孟宗竹で作った太鼓と遠赤外線で焼いた細い竹です。（写真6、写真7）

竹の笛には太鼓以上に興味があり、以前から篠笛を吹いてみたいという願望がありました。『篠笛のつくり方』に出会ったのも何かのご縁だと思います。

ど素人で恐縮ですが宜しくお願い致します。」

山田さんは、孟宗竹を用いて太鼓を作っている。それをいろいろな方面に利用したい。笛も吹いてみたいということである。自分で作った太鼓があれば、自分で作った笛がほしくなる。山田さんは金沢市立図書館へ行って笛の作り方の資料を調べる。長時間かけて、やっと一冊の本が見つかった。その本は「篠笛のつくり方」。山田さんはその本を手に入れたく、出版社の三心堂に電話を入れる。その本は絶版になっている。山田さんは著者である私の電話と住所を調べる。山田さんは電話を入れ、手紙を書く。

山田さんとの出会いには、このような経過があったのである。

山田さんは笛を作りたいというので「石川県の隣りの福井県大野郡和泉村に笛の資料館・笛の館があり、そこで笛を作ることができる」とこたえる。すぐに山田さんは和泉村に出かけ、体験し、手紙をよこす。二通目の文面は次のようなものである。

「拝啓　青葉の候、益々ご壮健にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

笛の資料館のこと教えていただき有り難う御座いました。福井県和泉村に大変立派な『笛の資料館』がありましたので、早速行ってきました。当地から自動車で2時間半、100km 位です。福井県の秘境、静かな良いところでした。あまり人に知られていないようで、5月と6月2回行きましたが、当日の来館者は私一人でしたので、ゆっくりと笛作りを体験してきました。

笛師の田中敏長氏の笛作りと笛の吹き方の指導を受けて来ました。持参した煤竹で7本調子の笛を作って来ました。笛の吹き方では練習曲「四季の歌」ですが、何とか音が出るようです。笛作りでは笛師は肝心の所はぼかしてるように感じました。

素人に教えるのですから（講習料3千円）は当然でしょうけど、探求心旺盛な私には何か引っ掛かります。」

その時、笛の資料館で撮影した、源義平の青葉の笛、平敦盛の青葉の笛、田中敏長作の一本調子から十二本調子の笛、12本の写真が手紙の中に入っていた。

（写真8、写真9、写真10）

山田さんから、笛の資料館でいただいた「四季の歌」の譜面上の個々の音は何とか出るようになったが、ドレミの置き換えが出来ない。あなたの笛は6孔でドレミ音階とお聞きしましたが、それはどのようなことなのでしょうか。という質問を受ける。

そこで実物の笛を送ることにした。すると、すぐに、

「笛、有り難う御座いました。ドレミがすぐに吹けました。たまたま、小学6年生の孫が宿題の工作、笛に挑戦したいと言うものですから、送っていただいた笛を標本に孫と笛作りをしました。出来上がって5分くらいで、ドレミをすぐに吹いていましたが、驚きました。」という返事をもらう。そして、山田さんから次のような手紙が届く。

「本年末を目標に倶利伽羅塾で笛の手づくり教室を開き、大勢の方々に笛を広めたいと思い、皆さんと準備を進めています。（将来は小・中・高の子供達に広めたいと思っています)。松田さんのおっしゃる通り、現在までに笛の資料館で笛師に習った笛では、どうも吹けない笛になってしまうようですので、出来ましたら松田さんの笛づくりを普及させてもらえないかと思っています。是非ご検討お願いします。

何せ徒手空拳やる気だけで動いてますので、ご迷惑をお掛けすると思いますが、意気に免じて何卒宜しくお願い致します。

竹材は津幡竹炭組合（理事長池内良輔氏）で秋以降準備していただけます。笛づくり場所は倶利伽羅塾（津幡町)、指導員は私を含め組合・倶利伽羅塾の方を中に勉強中です。

当初は生涯学習教育の一つとして取り組みますが、ゆくゆくは小・中・高に対象を広げて行きたいと考えてます。基本姿勢は”皆でやろう”です。

津幡町の竹炭組合の製品展示（竹炭が中心です）が、9月4日から10日までの間、県の地場産業振興センターで行われますが、その際、松田さんの笛を展示させていただけると有り難いのですが、いかがなものでしょうか。お送りしていただいたご本も展示しますが（絶版扱いを表示）新しい本のことを案内したいと思いますが、いかがなものでしょうか。（中略）

笛の資料館で作った笛を近日中にお送りしますので検分して下さい。

調律をどの様にして行えば良いのか勉強したいと思っております。

宜しくお願いいたします。」（平成10年8月28日）

「笛を展示してもいいですよ」と山田さんに電話で伝える。山田さんから、その時の写真が送られてくる。

「先生に送っていただいた笛は、展示コーナーの正面に写真のように展示しました。地場産業センターの展示会は10日無事終了しました。大変盛況でした。笛、とくに手づくりで笛を作ることと、ドレミ音階の調律に皆さんの関心があったようです。いつから何処で笛づくりが体験できるのかと、かなりの方々から質問がありました。

福井県和泉村の笛の資料館に展示会の案内をFAX しました所、和泉村教育委員会社会教育課の方が見に来られました。（後略)」（写真12)

山田治さんの「笛づくり」にかける熱心さ、情熱と真摯な態度に心打たれ、手紙や電話では「笛づくり」の心髄を伝えることは、むづかしいので石川県と福井県へ出かけ交流することにする。

何度か計画を立てたが、集中豪雨などいろいろな事情によってつぶれたが、10月7日（水）に新潟大学で開催される園芸学会の秋季大会でのシンポジュウムで、発表することになっているので、その機会に石川、福井へ行くこととする。

著者は「野生植物の保護と利用における園芸学の役割りと今後の課題」の中で「レブンアツモリソウの増殖と今後の課題」を発表し、すぐに石川にむかった。

笛の旅第二集は、北陸道石川県河北郡津幡町の倶利伽羅峠からはじまり、福井県大野郡和泉村の「笛の資料館」「笛の館」への紀行であり、横笛（篠笛と龍笛）の製作と地場産業育成（竹炭やマコモ）を含む旅でもある。

（1）「倶利伽羅竹炭組合」

午前7時33分、新潟発大阪行の特急「雷鳥」55号が11時14分に金沢駅に着く。山田さんは改札口まで迎えに来てくれる。初対面であるが、手紙や電話でのやりとりがあるので、旧友が再会したと表現した方がよいであろう。山田さんの車に乗ると「安全運転で行きますよ」と一言、車は津幡町にむかう。山々に囲まれた津幡町大坪の山裾には孟宗竹の林がつづく。ここに「竹炭の窯」4つと「遠赤外線の窯」2つを有する「倶利伽羅竹炭組合」がある。

理事長である池内良輔さんは「自ら創始した水産加工会社マルイケを早々と息子に任せ」、竹炭づくりをはじめ特産品づくりに精だす方である。池内さんの名刺の裏には「オー人様、人生一回限リ、過去ハ完了。未来ヲ語リ夢ヲ創ロウ！今スグ行動ダ！」と印刷してある。「夢をもって、大丈夫だと信じてやれば、きっと実現できる」という夢追い人である。池内さんは「すっかり竹炭の魅力にとりつかれてしまった」と話す。津幡町の特産品、竹炭の普及に力を注いでいる。

竹炭から開発した製品の写真をあげておく。（写真13～写真19)。

池内さんは竹に遠赤外線を照射して、短時間で煤竹

（すすだけ）をつくる方法を開発している。

池内さんの奥様は中山間地の転作田用として土着菌、黒穂菌を用いてマコモタケを栽培している。マコモタケは根元の茎の部分、約２０cmが食材として用いられる。

イネ科の食材、マコモ（マコモタケ）の写真をあげておく。（写真20）

（２）「倶利伽羅塾」

次に津幡町に1998年４月にオープンした「歴史を秘める峠みちに一大交流郷」、宿泊・研究施設である「倶利伽羅塾」へ行く。

ここのカタログには「よみがえる歴史とロマン、いにしえの街道・倶利伽羅越え」とかかれている。そして、クラフト体験工房では「陶芸」、「手芸」、「郷土料理」、「絵てがみ」、「パソコン」など誰でも自由に楽しくチャレンジできる。担当しているアシスタント・マネージャーの山崎清恵さんと出会った。

山崎さんは福井の和泉村の「笛の資料館」、「笛の館」でつくった笛では、なかなか音がでず頭を悩ませているという。クラフト体験工房の部屋に行き笛を吹く。篠笛が鳴り響いた。笛の音はクラフト体験工房から倶利伽羅峠の彼方まで流れていったであろうか。

私は山崎さんに一本の笛を「これ鳴りますよ。吹いてみて下さい」といってわたした。山崎さんは笛を持ち、かまえて吹きはじめる。すぐに音がでる。「ドレミ音階はこうですよ」というと、あっという間に曲になった。

山田さんと山崎さんは将来、「倶利伽羅塾」の体験の中の一つに「篠笛づくり」を加えたいという。山田さんは「松田流篠笛としてとり入れたらいいのでは」というので、私は「地元には地元の人たちにあった名をつけた方がよいと思いますが」とこたえると、山田さんは「倶利伽羅笛でどうでしょう」と提案したので、私は「それがいいでしょう。倶利伽羅笛が」というと、みんな納得、納得である。

私は山崎さんへ埼玉に帰ったら篠笛を一本送ることを約束して「倶利伽羅塾」をあとにする。

（３）和泉村「笛の資料館」「笛の館」

池内さんの車で、その日のうちに和泉村まで、つっ走ることとなる。車は国道157 号線を野々市町、白峰（山越えの道路）を経て、石川県から福井県に入り、勝山、大野を通り和泉村へむかう。

平安末期、源平合戦では戦に破れた側は一族、親、子供、女、赤子まですべての生命が奪われるのである。

生きのびるには、人が住める場所では不可能であり、山の奥、また、その奥の奥、追手が追うことができぬところでなくてはならない。

和泉村はかって村長（むらおさ）が平治の乱で平清盛との戦に敗れた源義朝の嫡男・義平をかくまったところである。このことについて山田さんから送られてきた和泉村の「笛の資料館」にある源義平の青葉の笛のところに次のように記されている。

「平治の乱（1159年）に平清盛との戦に敗れた源義平（源義朝の嫡男）は和泉村の村長のもとでかくまわれた。この時義平の身のまわりの世話をしていた村長の娘、おみつと義平は恋仲になり、やがておみつは義平の子を宿した。しばらく平穏の日々が続くが父義朝が討たれた知らせに、義平は京に上る決意をする。義平は所持品の中から一管の横笛を形見に渡したと伝えられている。この笛が現在も和泉村、朝日牧雄氏（義平から数えて37代目）に伝えられている。

この笛は雅楽で用いる竜笛であるが笛の中央部で折れ、管尻が消失している。」

和泉村は福井県の秘境であり、山また山、山と川、山と谷とが交差するところであり、ここまでは平家の追手の足は届かなかったのであろう。

車は九頭竜川、鷲ダム、九頭竜ダムを経て本日の宿泊地、和泉村のパークホテル九頭竜に着く。

次の朝、ホテルのすぐ近くにある「笛の資料館」「笛の館」を訪づれる。そこで笛の交流が行われる。「笛の館」の方は神楽笛を吹く。私は篠笛と竜笛を吹く。篠笛ではドレミ音階でいろんな曲を吹けることを説明し、竜笛は北海道江差町姥神（うばがみ）神社に伝わる平敦盛の「青葉の笛」であることを話す。また、自作のドレミ音階のできる篠笛を一本贈呈する。

「笛の資料館」には久保井朗童作の篠笛、一本調子から十二本調子までの12本が展示されている。久保井朗童作の五本調子の篠笛を写真21にあげておく。

この日、源平の歴史を秘める倶利伽羅峠と和泉村とが笛で結びつくこととなる。

引用文献・参考文献

１）　井出聖子（1992）青葉の笛物語
その一　源　義平
その二　平　敦盛

フォーラム・青葉の笛
和泉村教育委員会　p．1 ～10
2）　木下順二　文（1991）義仲
瀬川康男　絵　　絵巻　平家物語（六）
ほるぷ出版　p．4 ～7
3）　美濃晋平（1992）複数の青葉の笛―――
各地に伝わる青葉の笛とその意味
フォーラム・青葉の笛
和泉村教育委員会　p．21～32
4）　美濃晋平（1995）笛の意味するもの
一　笛に秘められた迫力と力
二　笛は息の芸術
三　笛は男性の象徴
四　笛は言葉の魂
笛の文化史　和泉村教育委員会p.1～25
5）　宮澤厚子（1995）臺明寺と青葉の笛
笛の文化史　和泉村教育委員会　p．46～54
6）　長野甞一訳（1968）倶利迦羅落とし
平家物語　ポプラ社　p．46～54
7）　中山正治（1992）義平公と青葉の笛―――
和泉村に残る伝承―――
フォーラム・青葉の笛
和泉村教育委員会　p．11～20
8）　大原富枝（1996）義仲北越の戦い
平家物語　集英社版　p.157～168
9）　佐藤謙三(1959)倶利伽羅落しの事
平家物語　上巻　角川文庫　p.322～325
10）　高橋貞一校注（1972）倶利伽羅落
平家物語（下）　講談社　p．24～27
11）　吉村　昭（1992）倶梨迦羅の戦い
平家物語　上　講談社　p.259～270
12）　市川雅巳（1999）竹炭で森林保全
読売新聞1月6日（水）
13）　池内良輔（1998）竹炭を全国に発信
北国新聞1月4日（日）
14）　池内良輔（1998）煤竹の花器　全国発信
北国新聞2月14日（土）
15）　池内良輔（1998）「竹炭」消臭剤をどうぞ
東京交通新聞3月16日（月）
16）　池内良輔（1998）竹炭で車内を消臭
北国新聞1月14日（水）
17）　倶利伽羅竹炭組合（1997）本物の煤竹
数時間で完成
建設工業新聞8月5日（火）

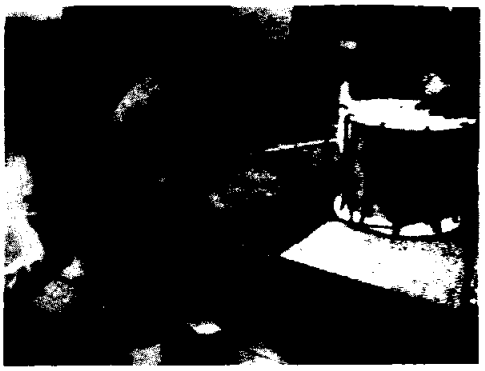


写真1　子供たちと太鼓作り

写真3　保育園での太鼓練習

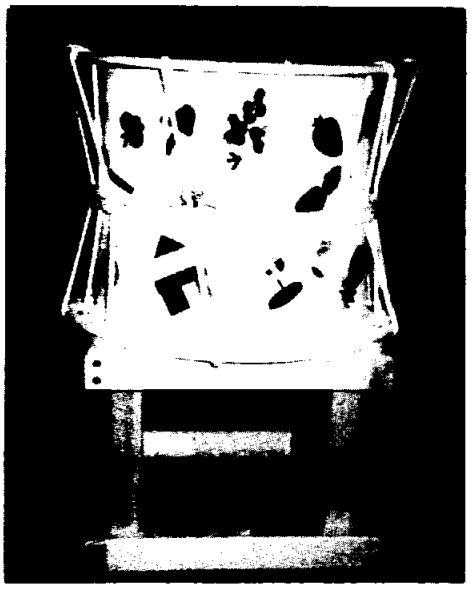


写真2　太鼓・完成品

写真 4　太鼓で高齢者との交流

写真 5　小学校 2 年の音楽授業時の太鼓練習

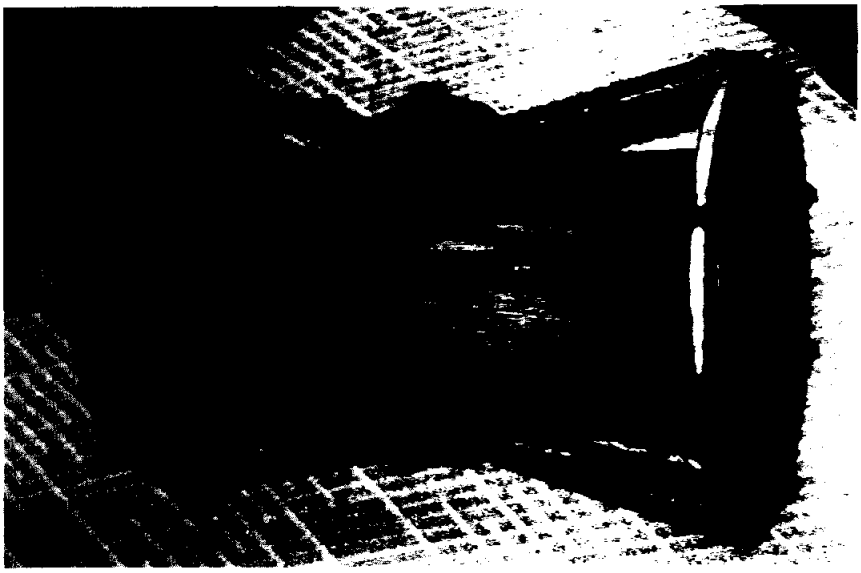


写真 6　遠赤外線による太鼓作り

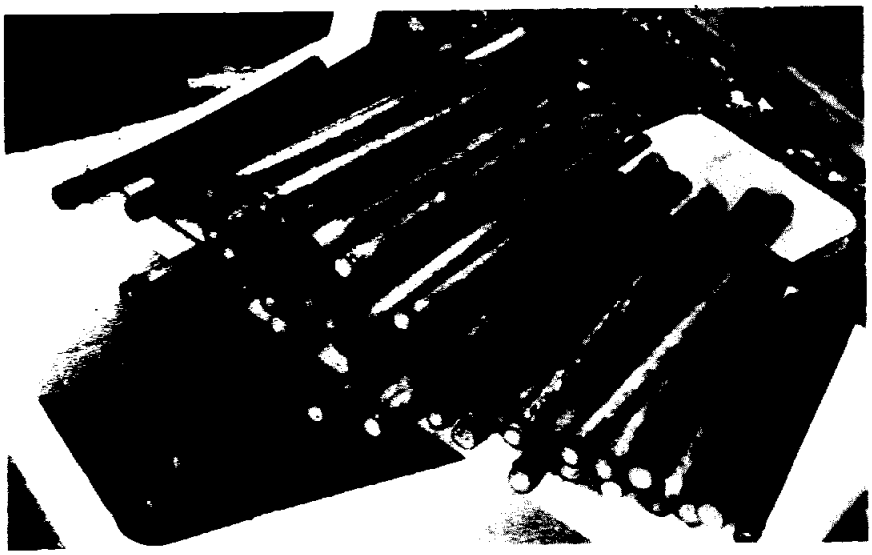


写真 7　遠赤外線処理による篠竹・メダケ

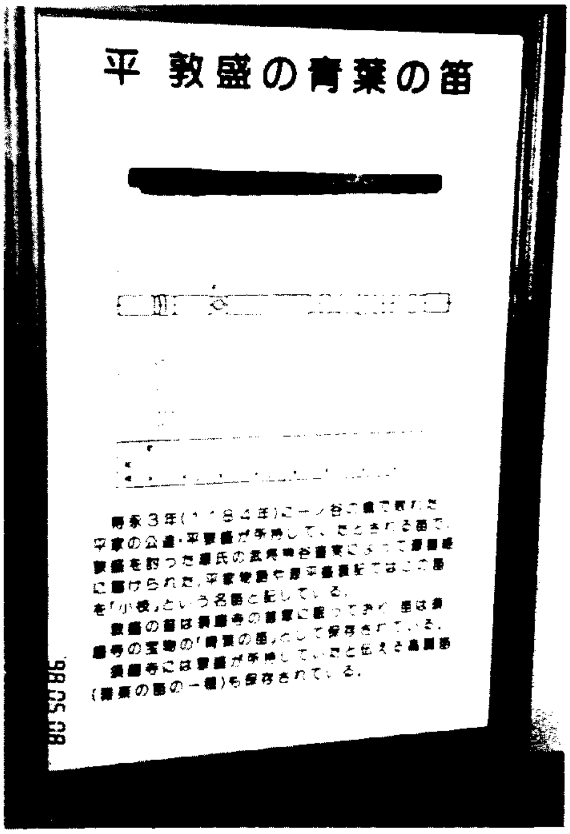


写真8　平　敦盛の青葉の笛

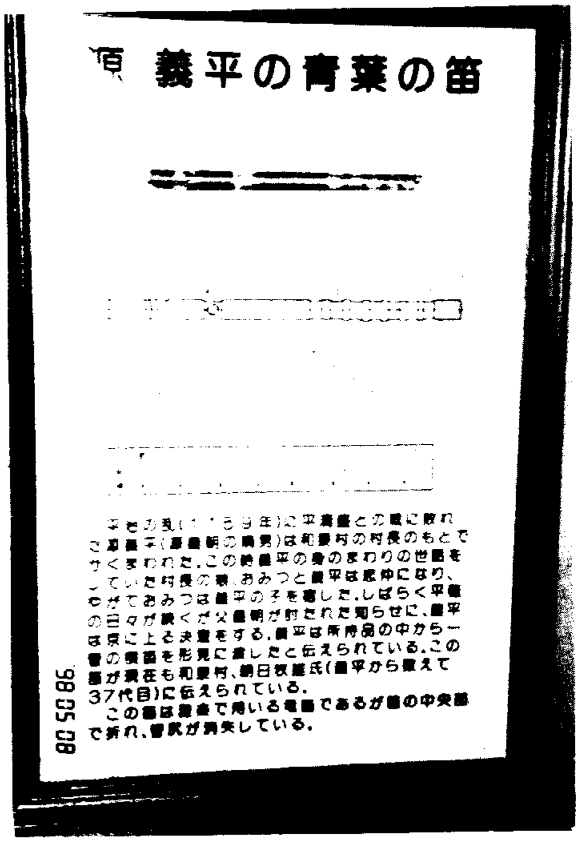


写真9　源　義平の青葉の笛

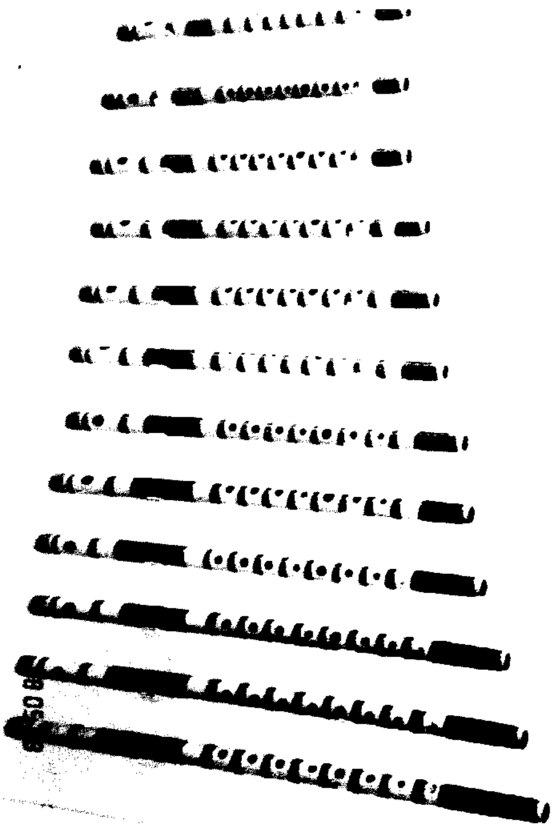


写真10　一本調子から十二本調子の笛
田中敦長作

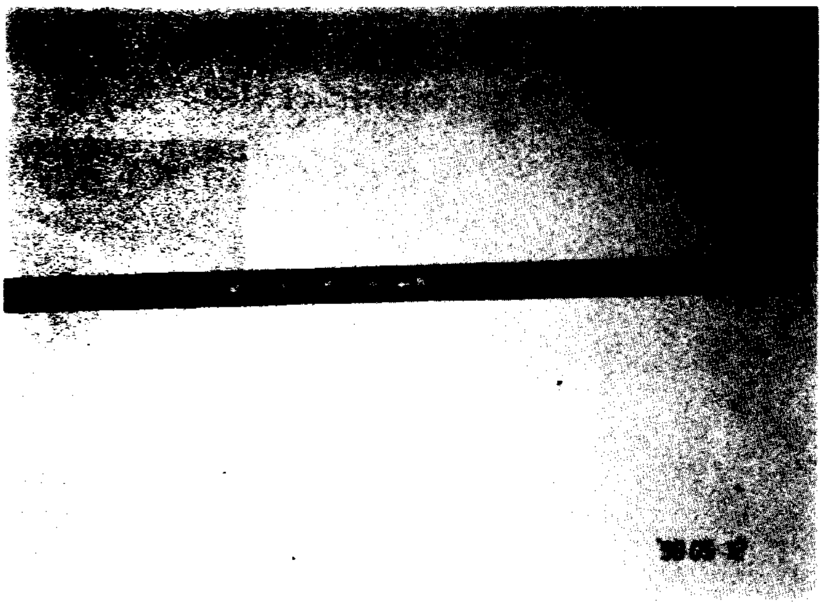


写真11　篠笛作り（笛の資料館於）

写真12　篠笛の展示（石川県地場産業振興センター於）

写真13　竹　炭

写真14　そばがら入り、竹炭枕

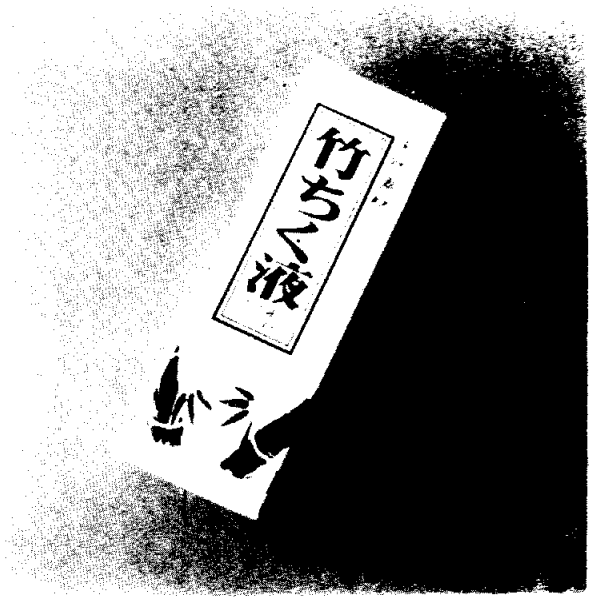


写真15　竹ちく液

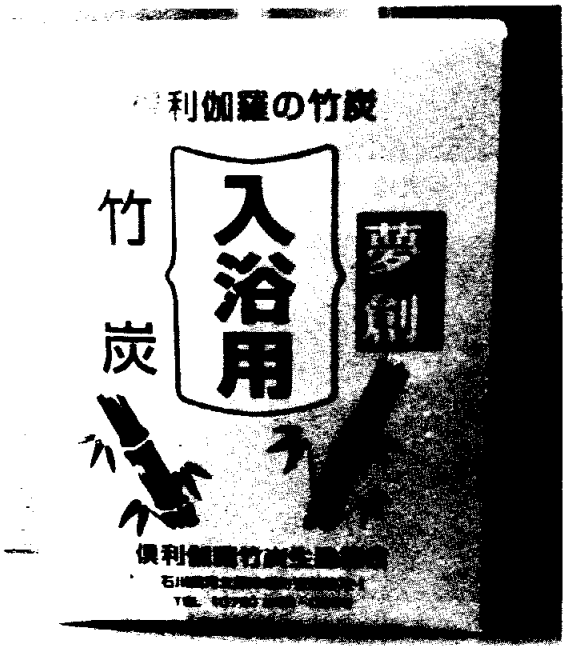


写真16　入浴用竹炭

写真17　除湿・脱臭用竹炭

写真18　冷蔵庫用脱臭竹炭

写真19　ペット用脱臭竹炭

写真20　イネ科の食材、マコモ（マコモタケ）

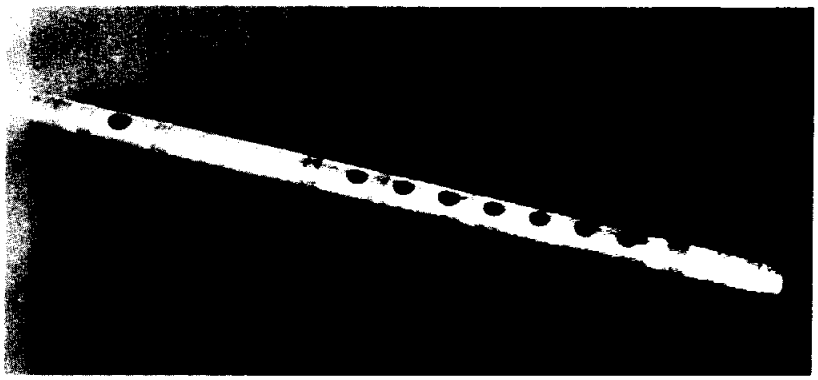
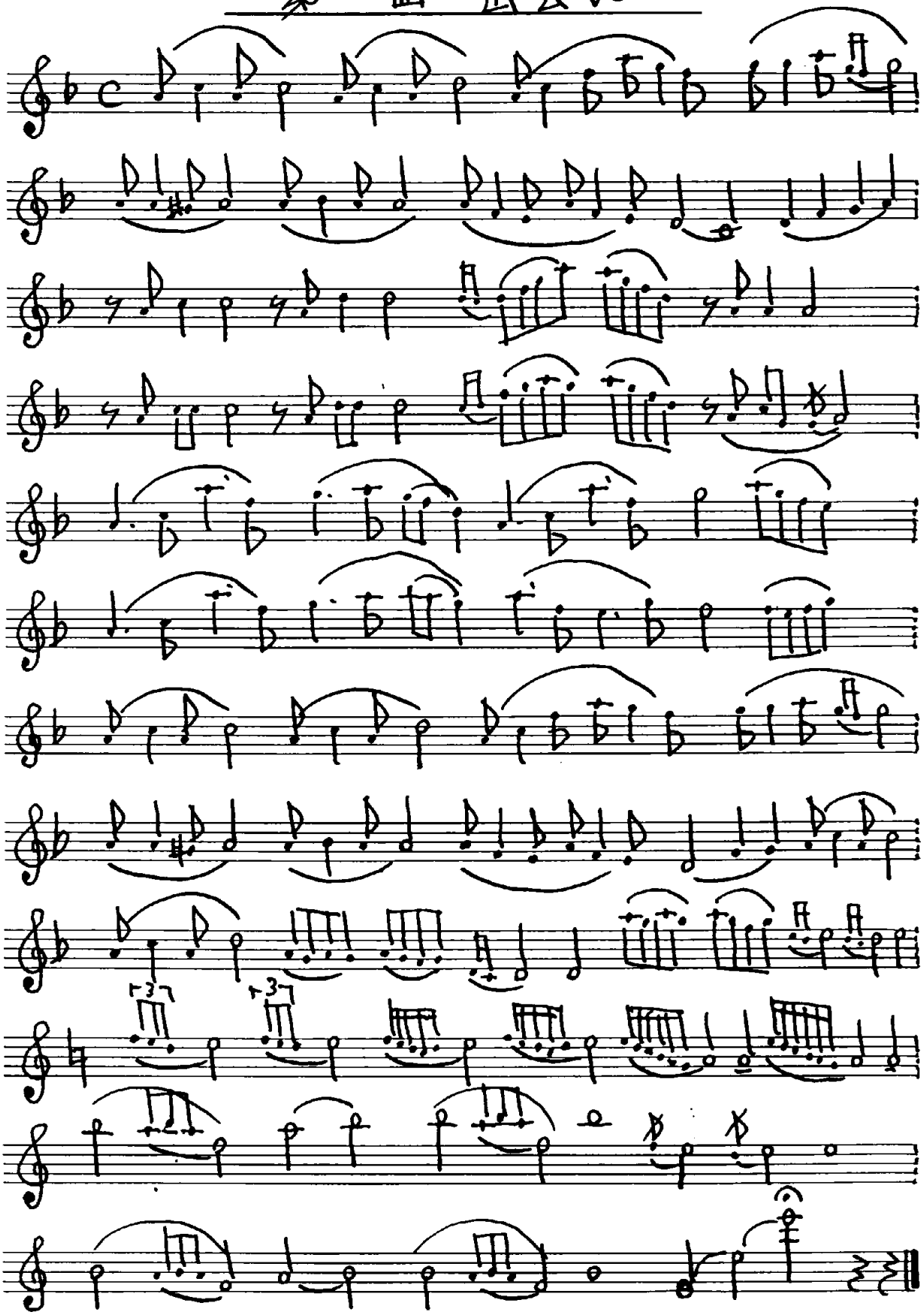
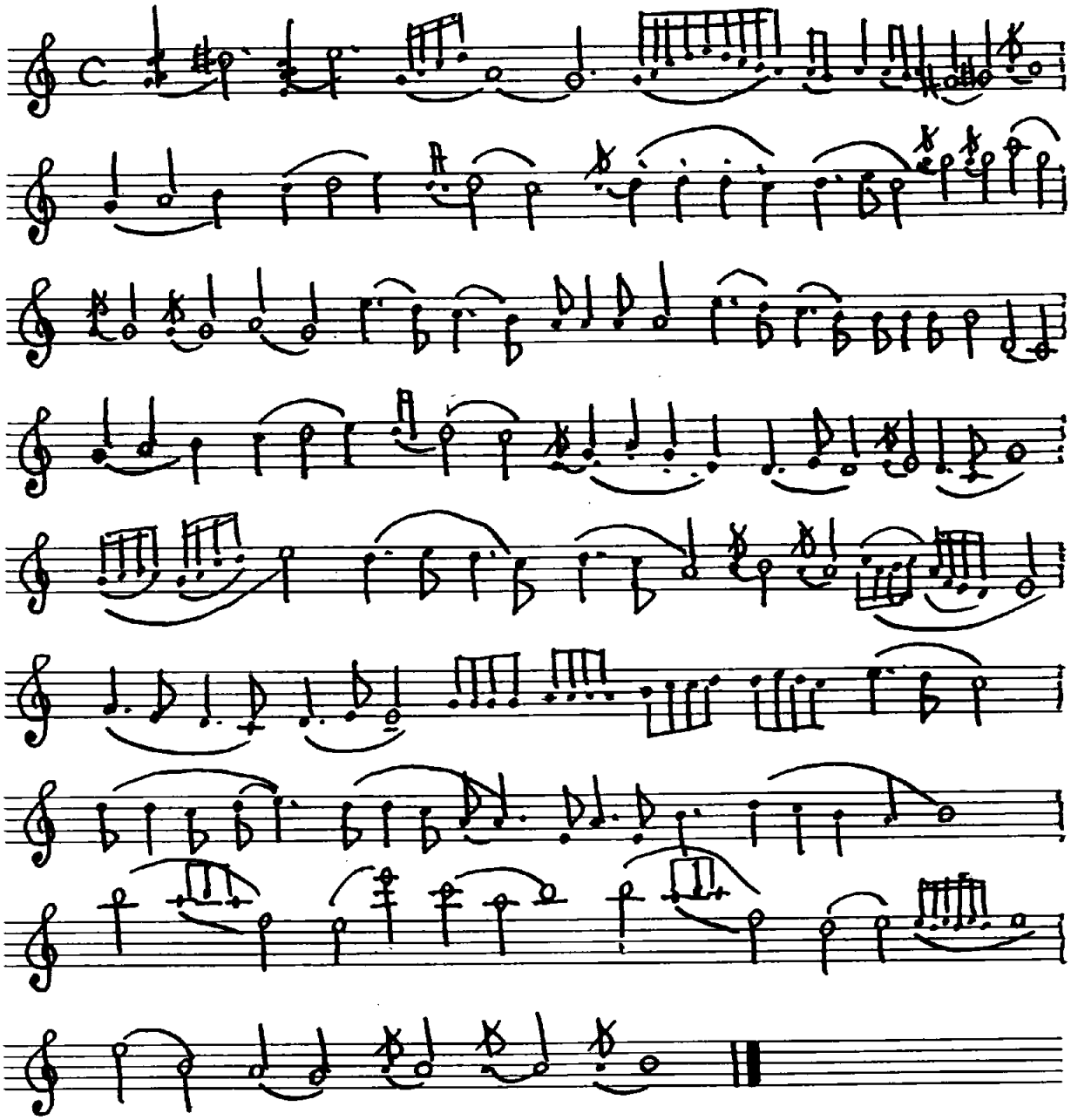


写真21　久保井朗童の篠笛（五本調子）

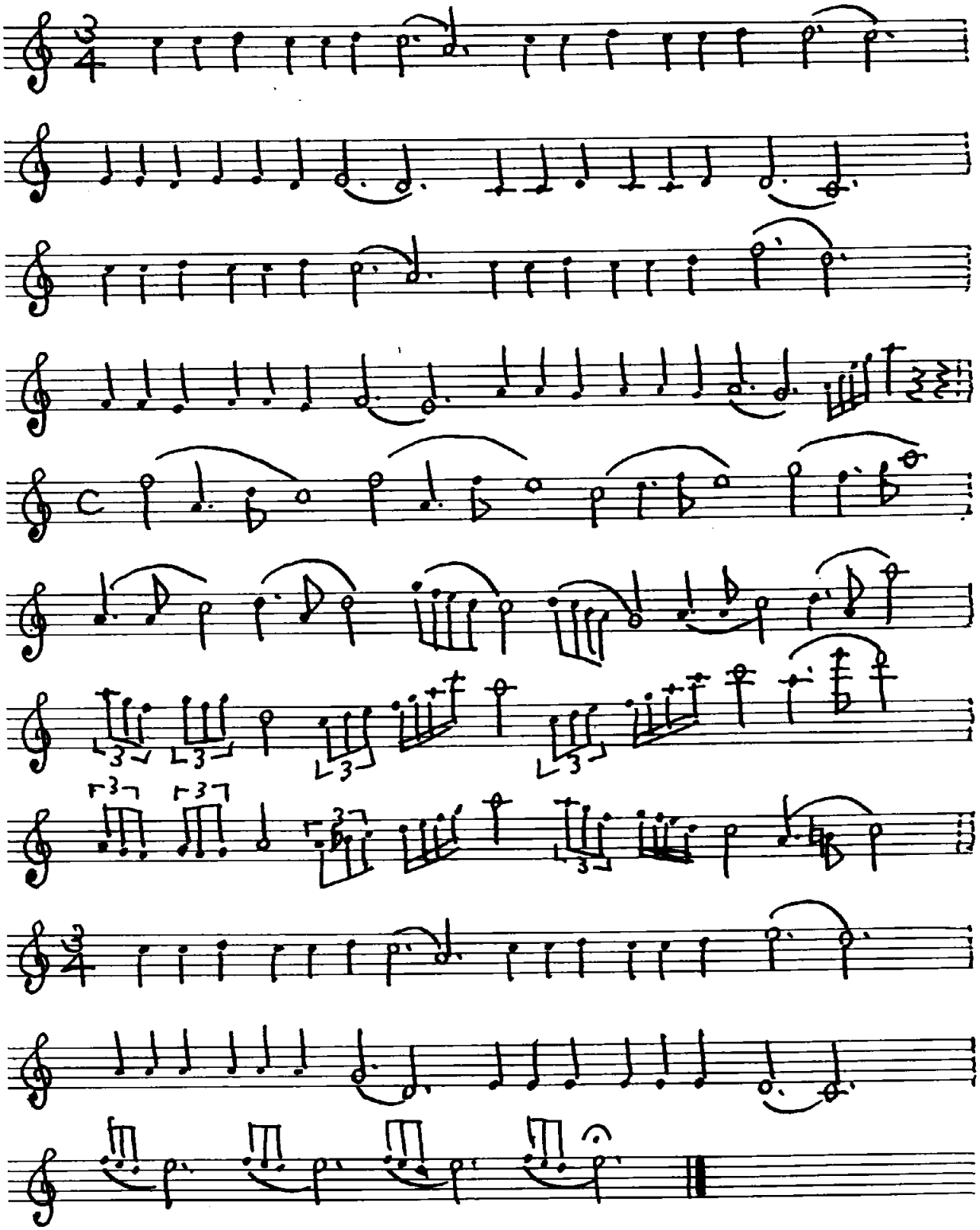
第一曲　出会い



第二曲　竹林に

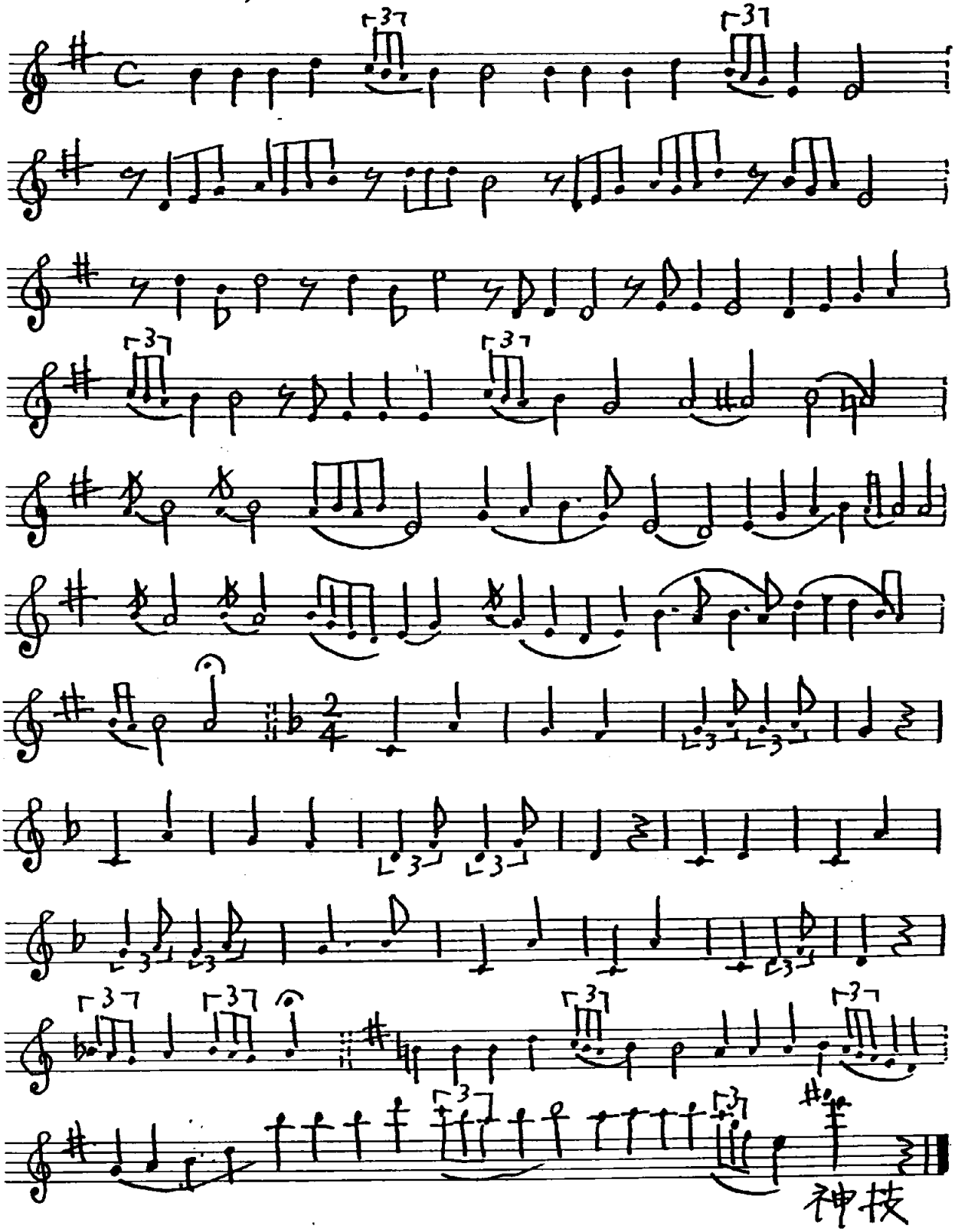


第三曲 マコモタケに寄せて

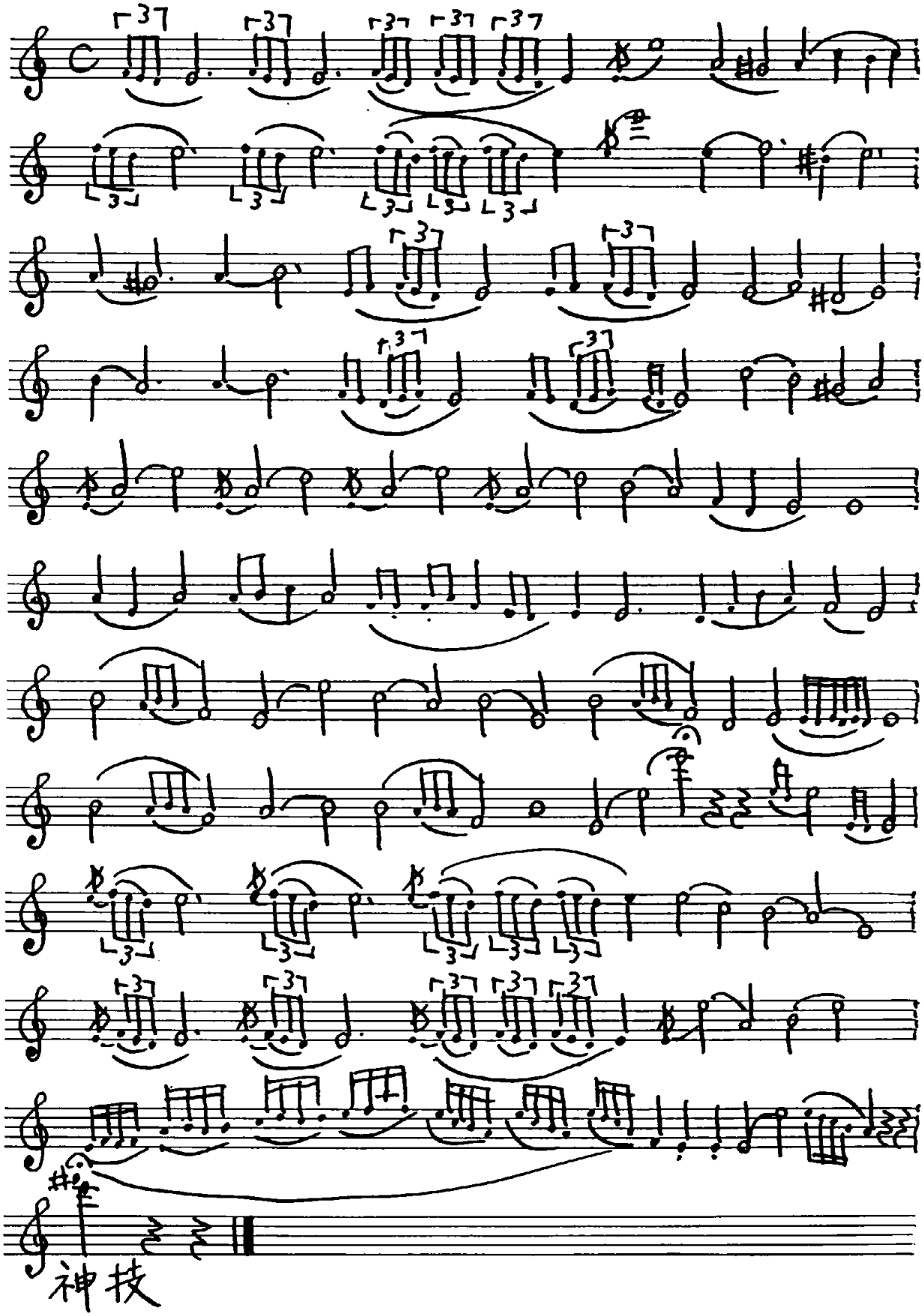
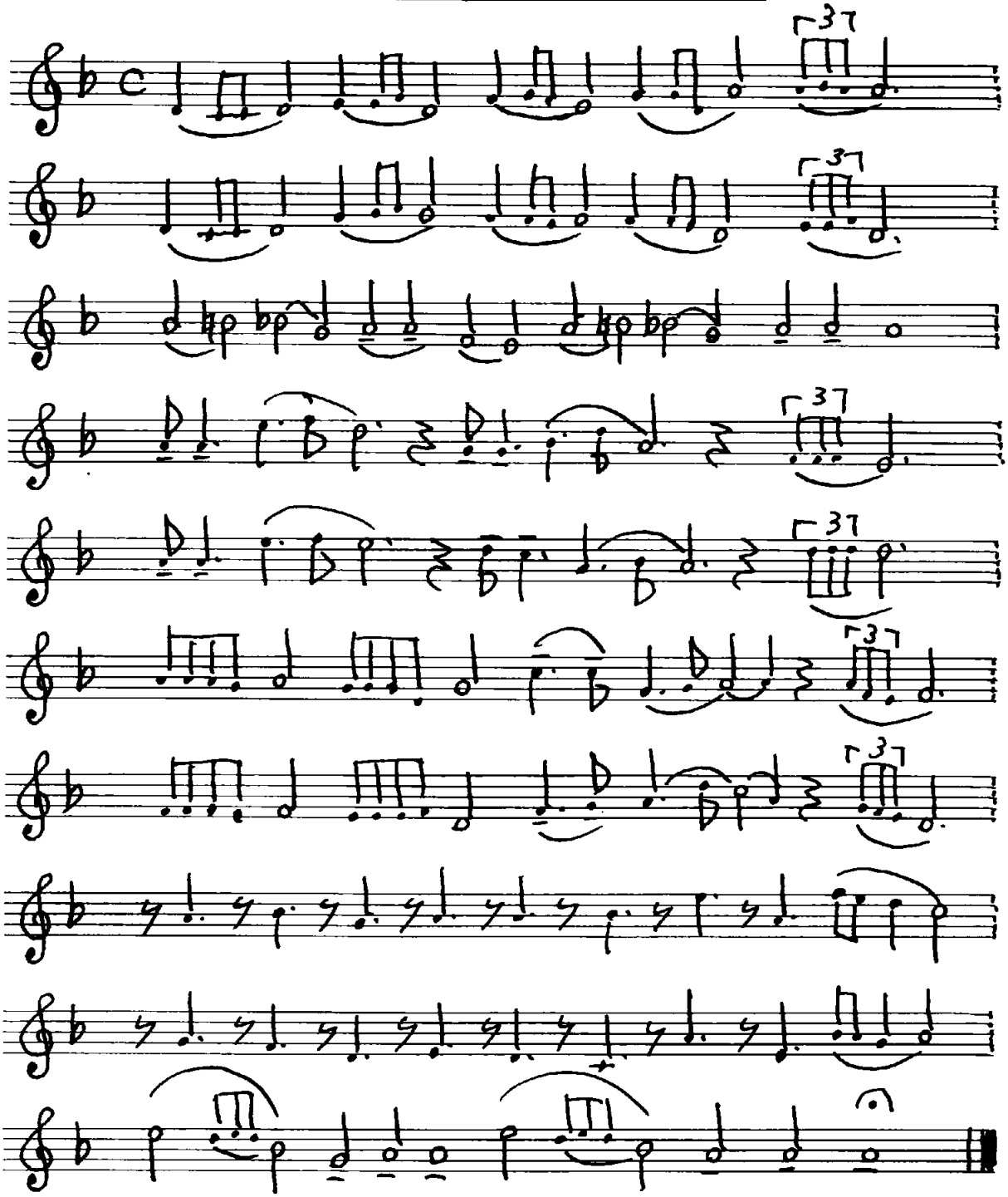


倶利伽羅塾

第四曲　クラフト工房にて



第五曲 ふるさと津幡倶利伽羅峠



第六曲　和泉のこもり唄